

第69回 Kozoom28 「春を彩る花を愛でる」

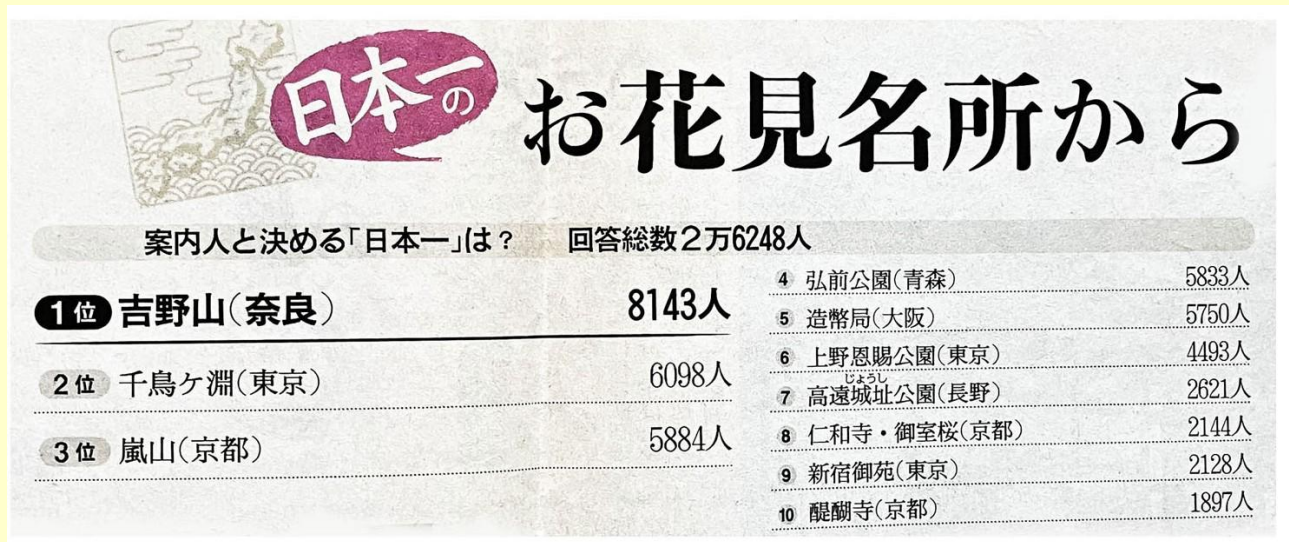
清水健二

年が明け徐々に日差しが明るくなり、何処からか梅の香りが漂よい始めると、春の訪れを感じられて気分が和らぐ。三寒四温を経て早咲きの河津桜が、あちこちで濃いピンクの花が華麗に咲き乱れる。3月下旬には各地から花便りが届き始め、にわかに春爛漫の装いに人々は活気づく。日本人は古来から桜の花に異常な程の思い入れがあって、豪華に咲き、あっという間に散る様が人生の無常さに通じるものに共鳴するのであろう。

1200年前の万葉時代から万葉集4516首の歌には、桜は約50首だが梅の花は118首と多い。因みに最多は萩で141首と人気があったようである。当時の桜は現在のソメイヨシノでなく、山桜が親しまれていたようである。いずれにしろ梅や桜への愛着は春へ向かう希望と喜び、特に年齢を問わず4月は別れと出会いの時期が、桜の開花に当たるため一層印象深く心に残り、日本人のDNAに引き継がれているのであろう。

梅の花は少々寒くても咲き始め、花に雪が積もっていても咲くのに、桜は温暖な日が続かないと咲かない。それは梅は冬の寒さ経験するとスイッチが入って開花する「休眠打破型で桃の花も同様だが、これに対し桜は温度蓄積型と言う。菜の花は日照と気温が両立しないと開花しないようである。早春の冷え込みの中で凜と咲く水仙も清々しい。

多くの花は時代を経て季語となり花言葉として、花が持つ意味やイメージを歌人や俳人が詠んでいる。例えば桜は「精神美」「華やかさ」「散る儚さ」と言った日本的な美意識の代名詞として表現され、現代にも人々の心に、春＝桜が刷り込まれていて、TVでも地方の花便りが耳目に届く。私のスクラップブックを見ていたら、お花見名所のトップは奈良の吉野山であった。桜以外にも四季を通して美



しい景観に恵まれ、私は若い時から吉野山系をよく歩いたものである。「歌書よりも軍書に哀し吉野山」とも言われるほど、多くの歴史を残しているし、源義経が奥吉野に逃れ、それを庇った佐藤忠信が立てこもった花矢倉などが自分の足で確かめたものである。

先日新聞の記事に日本人の好きな花のランキングが出ていてやはり首位は桜だった。今年も大阪の造幣局の桜の通り抜けは4月9日から15日に行われると発表されていた。約500m強の道のりに140種、330本の桜が絢爛と咲く。そして30万人以上が来場するので、事前申し込み制になっているというから驚きである。

私の住む八尾市内は、2月から4月末の3ヶ月の間だけでも、社寺の境内、公園や生駒・信貴山麓など、随分と種々の花が咲く。私は写真に興味があって、花の写真を仲間たちと撮影によく出かけるが、絵ハガキ風の写真（写真家の先生から個性の無い写真は面白くない、といつも叱咤されている）を含めて、私好みの写真も合わせて、今回は我家の近くで撮影した写真を披露させて頂く。珍しい洋花より伝統的な花に限定してご紹介することにしたい。ご笑覧ください。

令和8年3月

記





雪椿（八尾神社）



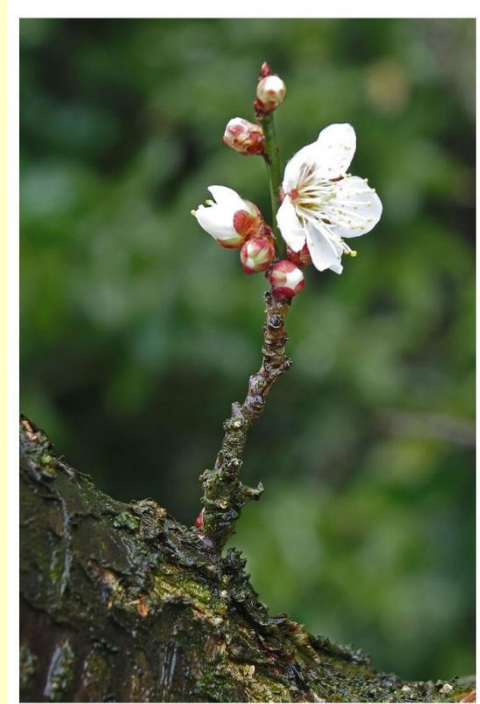
水仙と紅梅（八尾信貴山麓）



水仙（八尾神社）



満開の桜（八尾神社を望む）



白梅（八尾市内・公園）



桃の花（我家の玄関傍）



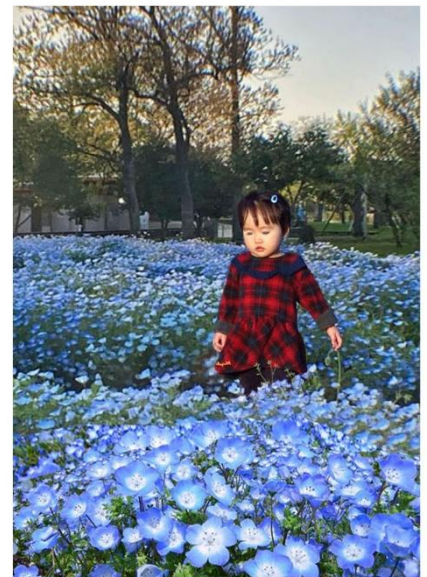
夜桜（長瀬川沿い）



さざんか（我家の裏庭）



夜の雪柳（長瀬川沿い）



ネモフィラ（久宝寺緑地）